流れる

田中文夫

第一章　一九九三年
1

流介（りゅうすけ）は、夜明けが好きだ。
ジープ・チェロキーのアクセルを、めいっぱい踏みこむ。四千馬力のエンジンが心地よい唸りをあげて、真っ赤なボディが森を駆け抜ける。
透明な空気が流れる。生命が蘇る瞬間だ。
河原流介（かわらりゅうすけ）は鮎師だ。六月から九月まで夏場のほとんどを鮎の川で過ごす。
鮎の友釣り、この熱病を患ってから五年になる。川の石につく苔を一日中、食（は）みまくる鮎の習性を見て、こんな技法を発案した者を恨みたくなるほど、この釣りは面白い。
鮎は、石についた苔しか食わない。美味しい苔のついている一等地の石の周りに自分の縄張りを持って、侵入してくる他所者の鮎を激しく追う。
鮎師は縄張り鮎がいるポイントを見つけて、長い竿でコントロールしたオトリ鮎を近づける。野生の鮎が自らの餌場を守る執念はすさまじいもので、たちまち侵入者に体当たりをくわせる。その瞬間、オトリ鮎にセットされた掛け針で鮎を釣るのが友釣りだ。
だからこの釣りは、友釣りではなく「喧嘩釣り」といった方があたっている。
「さーて、今年は、どんなシーズンになることやら」
流介はつぶやく。
六月一日は、鮎師の元日だ。今日の解禁日のために、流介は、デジタル・アートディレクターとしての仕事を整理した。オフィスのマッキントッシュには、秋まで、ひたすら川狂いをしても、あまりある情報をたたきこんである。新しいコンピュータ・グラフィックス・パターンのデータを小出しにしていくだけで、年収は確保できる見通しだ。
「時は今。いざ釣らんかな。鮎は愛。愛は河原に宿りたまう」
でたらめな歌を口ずさんでいるとき、電話が鳴った。流介のチェロキーには電話とファックスがついている。夏中、気ままな生活をしている流介の必需品だ。
「流介、遅い、今どこだ」
しわがれ声が受話器から飛びこんできた。
「あっ、師匠。すみません。夕べちょっと遅かったもんで」
「女か」
ぶっきらぼうに応対するのは、流介を鮎釣りの世界に引っ張りこんだ古屋秀次（ふるやひでじ）だ。
「解禁前夜にそんな余裕あるわけないでしょう。ひと夏、鮎にのめりこむために、パソコンとにらめっこですよ」
「何でもいいが待ちきれん。蜂の巣ポイント、双子岩だ」
それだけ言うと電話は切れた。
「師匠、気合い入ってるなあ」
厳しいカーブが連続する林道を疾走しながら、流介の心も川に飛んだ。
古屋が電話をかけてきた杉山オトリ店まであと十五分。入漁券とオトリを仕入れて、指定された場所まで三十分。その間に師匠は、五尾は掛けているだろう。
こいつは解禁日から厳しい勝負になりそうだぜ、と気持ちを引きしめた瞬間、バックミラーに飛びこんできた黒い車が、ブラインドカーブで追い越しをかけた。鋭いエアホーンをあびせながら追い抜いていったのは、フルサイズのランドクルーザーだ。
解禁日には気持ちが焦る。他人よりちょっとでも早く良いポイントに入った者には、釣果が約束されているからだ。解禁日の鮎は、まだスレてなく、オトリ鮎が自分の縄張りに入ってくれば、必ず激しい追いを見せる。しかし、ポイントの選択を間違うと多くの人出のために移動もまま

ならず、不本意な結果に終わることがある。
　それにしても、解禁日から事故ったらどうしようもないだろうが、あの馬鹿。ブラインドカーブで追い越しをかけるのは、想像力がない証拠だぜ。

　杉山オトリ店は、香美川（かみかわ）の入漁券とオトリ鮎を求める鮎師でごった返していた。
　解禁日の興奮を楽しむ彼らの中にあって、長身に銀色のヴェストを着こなした流介の姿は、際だってスマートである。髪を後ろに束ねたその顔色は、もう夏のものだ。
「流ちゃん、ええ友、持って行きや」
　流介を見つけた杉山のおっちゃんが声をかけてくる。
　鮎師は、オトリ鮎のことを友と呼ぶ。その日の釣果を左右するのは最初のオトリだから、鮎師は誰でも、友の選択には慎重だ。
「おっちゃん、今年もお世話になります」
　流介は笑顔で挨拶した。杉山が選んでくれた元気のいい友を二尾、オトリ缶に入れて、すぐにエアーポンプをセットする。
「流ちゃん、今シーズンの目標は？」杉山が、友を鮎師に渡す手を休めずにたずねる。
「目標千五百尾！　と言いたいけど、自分で納得できる釣りができればいいよ」
「またまた、ええ子ぶってからに。ほんまは、今年こそ師匠を追い抜いて、リバーラン・カップの優勝、狙とんやろ」
　杉山の言葉にちょっと照れたような微笑みを返して、流介はジープ・チェロキーに乗りこんだ。
　蜂の巣ポイントというのは、師匠の古屋と流介だけが分かる符牒で、秋になると崖に雀蜂の巣ができる。痛い目に会いたくなければ注意が必要なところだ。
　流介は、チェロキーのセレクターを四ＷＤにシフトして、川原に下りていく。狭い川原には、すでに数台の四輪駆動車が駐車してあった。ゴツゴツした岩場をクリアーして、駐車スペースを確保する。オフ・シーズンには、狭っくるしい街中で窮屈そうなチェロキーも、この季節を待っていたようにオフロードカーとしての本来の実力を発揮する。
　菅笠をかぶって、川岸に立つ古屋秀次の独特のスタイルは、遠くからでもすぐに分かる。
車を降りた流介は、古屋に近づき、その足もとの透きとおった水にオトリ缶をつけた。
「師匠、今年もお手やわらかに……」
　その瞬間、大岩の周りにオトリを泳がせていた古屋の竿に衝撃が来た。
「でかいぞ！　流介！」
　野性をむき出しにした野鮎は、オトリを引きずって一気に下流に突っ走ろうとする。その勢いを極限までためこんだ竿が、力強い弧を描く。
　鮎師、至福の瞬間だ。
　長い竿を支えて、腰にさした玉網（たも）を抜き、野鮎とオトリ鮎が水面に浮かんでくるタイミングをうかがう。
　竿のパワーが野鮎のそれを上回った瞬間、二尾が空中に舞う。糸に吊り下げられた輝きが振り子の原理で飛んできて、ミットのように構えられた古屋の玉網に納まった。川面から引きはがされた野鮎が、口惜しさに身悶えする間もない早業だ。
「ストライーク！　相変わらず見事なお手並みで……」
「馬鹿野郎、人のことにかまわず、お前も早く釣れ」
　いま釣ったばかりの野鮎に鼻カンを通しながら、古屋が言う。
「はいはいはい」
　はやる心を抑えながら、流介はすばやく愛竿に仕掛けをセットする。友をオトリ缶から取りだし、玉網にいれる。左手で鮎を優しくつかみ、鼻の位置を探りあてて、すばやく鼻カンを通す。鼻カンからのびる細い糸には、オトリの尻ビレにうつ逆針と、イカリ型にセットした四本の掛け針がついている。
　さあ頑張ってくれよ、元気な友達を連れてきておくれ。

流介はひと夏の願いをこめて、清冽な流れにオトリを導いた。
流介と古屋の前には、大きな岩が二つ、頭を並べている。解禁当初には大型の鮎がつくことで知られている双子岩だ。流介は、古屋の下流の岩を狙ってオトリを泳がせる。最初の友は養殖鮎だから泳ぎが下手だ。いきなり流れの激しいところに入れると流されてしまう。プールしか知らないスイマーのようなものだ。
ゆっくりと、オトリ鮎の泳力を最大限に引きだしながら、岩に近づける、近づける。
ブルブル、とオトリ鮎の鳴動が竿に伝わる。野鮎の接近に怯えているのだ。
ゴゴン！　野鮎、渾身の当たりだ。
来た、来た、来た。今シーズンの第一号だ。
流介は、糸がめいっぱい張られた竿をゆっくりと、斜め後ろに回していく。竿の弾力に引かれて野鮎が流れを横ぎってくる。それそれ、もう少し。
目の前に近づいてきた糸をすばやく両手でたぐり寄せ、竿を担いで左手で玉網を抜く。オトリ鮎と掛かり鮎を水中からつまみあげて、ひょいと玉網に吊りこむ。ほっと一息つく。
流介は、解禁日の第一号だけは、さきほど古屋がやったようないわゆる「引き抜き」をせず、「引き寄せ」で取りこむことに決めている。待ちに待った友釣りシーズンが本当に始まったんだ、という実感を糸を通じた掛かり鮎とのやり取りで確かめるためだ。鮎を空中に飛ばして玉網でキャッチする「引き抜き」は、スピーディだが、「引き寄せ」にもそれなりに別の味がある。
これこれ、この香り、この色。
流介は玉網いっぱいに広がった甘い果実の香りをかぐ。香魚といわれる鮎の中でも、香美川のそれはひときわ香りたつ。
釣りたての野鮎は、頭の後ろに、彩度を思いっきり上げた黄色を太い絵筆で塗ったような一筋の模様を持っていた。このいわゆる追い星が鮮明なほど鮎の闘争心は激しい。
こいつは幸先のいいスタートだぜ。絵に描いたような背掛かりだ。
流介はにやりとしながら、野鮎を新しいオトリにするため鼻カンを通した。流れにむかって送りだすと、背掛かりの野鮎は、放たれた矢のように流心に突っこむ。
ガツーン、たちまち、新しい縄張り鮎が追ってくる。キューン、糸が鳴る。
縄張りを犯すものの意志が明確なほど当たりは激烈だ。清流の女王の誇りにかけて、針をはずそうと疾走する野鮎の強引を、流介の愛竿が受けとめる。アルティザン社のニューモデル、ハイパー・ストリーム硬中硬九･五 メートルが、そのパワーをしっかりと包みこむ。
ハイパー・ストリームに導かれて掛かり鮎は観念した。ふわっと水面を切ってオトリ鮎とともに飛んでくる。流介の左手の玉網が、鮎にショックを与えないよう、ソフトにキャッチする。
友釣りの教科書に載りそうな引き抜きだ。二尾目も針がしっかり背中に掛かっていた。友釣りは循環の釣りである。掛けた鮎が次のオトリになる。元気なオトリを維持するには、鮎が弱らない背中に針を掛けるのが理想だ。背掛かりの鮎をキープしつづける者は、次々と新しいオトリが手に入る。ところが、運悪く腹に掛かって瀕死の鮎を取りこんだ者は弱ったオトリをそのまま酷使し、じり貧になる。富める者はますます富み、貧しきはますます貧しさを増す。この釣りは何かに似ている。
「調子が出てきたな」
古屋秀次が、弟子の技に満足した表情で声をかけてきた。鮎という文字が大きく染められた菅笠(すげがさ)の下の顔が、微笑む。人の心を和ませる年期の入った微笑み。
この香美川で「菅笠の秀」といえば、知らぬ者はいない。
「師匠、どのくらいいきましたかな」
「七、八尾かな」
「エンジン全開まで、あと一息ですかね」
「年寄りをあおるんじゃねえ」と言う声は流介への親しみに満ちている。
流介は、全身鮎の香りに染まって生きてきた古屋が好きだ。
その釣技は、友釣りテクニックの生きた歴史だ。古屋には職人にありがちな偏狭なところはなく、自分で納得すれば新しい道具、新しい釣法を取り入れる。その仕掛けはシーズンごとに何

か新しい工夫がある。
「流介、お前、友釣りを始めて何年になる？」
　いつもは無口な古屋も、流介に対してだけは、別だ。
「師匠のおかげで悪の道にはまりこみ、坂道を転がり落ちても竿だけは離さず早五年、今じゃ立派なアユ中毒の二七歳でございます」
「わしは、確かにお前に友釣りを教えた」
　古屋が遠い目になって言う。
「それは、あの頃のお前のうつろな表情が、気になって仕方がなかったからじゃ。せめて鮎釣りでも覚えれば、ちっとは元気になるかという親心だった。それが今では師匠を越えるアユ中とはなあ……」
「それ以上はもう勘弁してください。今日は解禁日ですよ、師匠。ごちゃごちゃ言ってる暇なんて……おおっと」
　流介の言葉を小気味のいい当たりが引きついだ。
「むん」
　ハイパー・ストリームを持つ手に力をこめる。
「ほう」
　古屋にも来たらしい。
　二本の竿が、満月になる。ゆっくりと竿を立て、その復元力で垂直になったとたん、ふわりと飛んできた鮎たちが、すとん、すとんと玉網に納まる。まったく同時だった。
　オトリに鼻カンを通す、放つ、泳がす、掛ける、抜く。
　放つ、掛ける、抜く。抜く。抜く。
　二人は川の杭になる。
　すっかり明けた空から太陽のビームがもれて、ブッシュの朝露を光らせた。風が鮎の香りをはらんで川面をわたる。鮎師たちの興奮が、空の青と林の緑と水のきらめきの間に広がっていく。
　流介は、若々しい鮎たちの生命を思うぞんぶん慈しみ、全身に清新なエネルギーが充満するのを感じていた。

　流介が初めてこの香美川を訪れたのは、五年前のことだ。
　その頃の流介は荒んでいた。美術大学を出たばかりで、広告のデザインをする小さな会社に就職したものの、自らの美意識とは、ほど遠い単調な仕事に飽き飽きしていた。
「知恵を出せ。知恵の出ない奴は汗を出せ。知恵も汗も出ない奴は去れ」
　その頃の上司の口癖だ。あまりにばかばかしくて、気が遠くなりそうだった。つまらぬことに知恵も汗も出す気が起こるか。
　　何かをやりたい、何とかしたい、不完全燃焼の情熱だけが、流介のなかで渦巻いていた。酒におぼれた。喧嘩もした。惚れてもいない女を抱きもした。
　そんなある日、流介は都会を離れた。
　浅い眠りのけだるい初夏の朝、身体いっぱいに充満した鬱屈を持てあました流介は、車を南へ走らせた。流介の住む街から二時間ばかりの山中にある禅寺を訪れたのは、まったくの気まぐれからだった。　その日は宿坊に泊まり、翌朝、久しぶりにアルコールの抜けた身体で帰路についた。途中、流介は香美川という名が気に入って、河原で車を停めた。
　ただ、ぼんやりと川原に座りこむ。川の中には、長い竿を構えた男たちがいる。流介は、それまでの人生の中で釣りというものに興味を持ったことはなかった。男たちが何を釣っているかも知らない。
「おい、若いの。何をぼーっとしてるんだ」
　声をかけてきたのは、菅笠をかぶって真っ黒に日焼けした男だ。
「何もしてません。ただここに座って、川を眺めているだけです」
　虚を突かれた流介が答える。
　竿を肩に担ぎ、どっしりとした腰の男は、こう言った。

「友釣り、してみんか」
「えっ、トモという魚がこの川では釣れるんですか」
「馬鹿野郎、鮎だ、鮎を友釣りで釣るんじゃ」
　ぶっきらぼうにしゃべる男の目の奥には、強い光がある。
　何で俺が鮎を釣らなきゃいけないんですか、という言葉をのみこんで、オトリをつけた男の竿を借りたのは、その光に誘われたからかもしれない。
　川岸に立って、男の言うままに竿を動かす。まもなく強烈なショックが伝わった。何が起こったか分からない流介は、無我夢中で竿を支え、スニーカーのまま川に入った。男が、張りつめた糸をつまむ。掛かった鮎を玉網に納めてくれる。
　その男、古屋秀次は、釣ったばかりの鮎を流介に触らせた。鋭い躍動が流介に伝わる。生命の固まりを感じた。
「……これが鮎……」
　今までの人生とは違うものに触れた流介は、言葉を失っていた。
「お前、今日からワシに弟子入りせんか」
　うなづいている自分に気づいた。物事をはすかいに見ることを自らに強いてきた流介は、思わず、首筋をマッサージした。
　その夏、流介は古屋のカンカン持ちをした。オトリ缶を持って、古屋の後ろをついていく。古屋は友釣りのすべてを流介に教えた。
　年が明けると、流介は会社を辞めた。かねてから興味のあったコンピュータ・グラフィックスのソフト開発で、なんとか食って行けるめどをつけたからだった。それはたやすいことではなかったが、はっきりした目標のできた流介には苦にならなかった。
　鮎師、河原流介が誕生した。
　この五年の歳月は、流介の人生の中で最も充実していた。一年のカレンダーは、六月から九月の鮎釣りシーズンを基準にして回る。
　鮎師としての腕は、めきめき上達した。香美川に通いつめるうちに、オトリ屋の杉山をはじめ、気心の知れた仲間も増えてきた。
　香美川の澄んだ流れで流介の心と身体は洗われた。
　今の流介は、アルティザン社のアドバイザリー・スタッフとして、古屋と並ぶ香美川の顔である。

　昼前までに、二人合わせて八十尾は釣った。竿と竿がぶつかり合うような人出も、二人には気にならない。さわやかな疲れを腕に感じ、流介が古屋に声をかける。
「師匠、このペースで釣ったんじゃ、解禁日で香美川の鮎がいなくなっちまう。俺は一休みしますよ」
「よし、飯にするか」
　鮎師は釣った鮎を生かしたままキープしておくために、曳き舟というボートの形をした収納具を腰のベルトにつないでいる。窮屈そうに鮎がひしめき合う舟から、大きなオトリ缶に鮎を移して、二人は川原に腰を下ろした。
　流介は缶ビールを取りだし、一本を古屋に手渡す。
　プシュ、プシュ。満ち足りた表情で川を眺めながら、師弟は喉をうるおす。
「今年の鮎は、よく追ってくる。漁協の連中、うまくやったな」
「去年の不漁で散々文句を言われたから、今年は考えたようですね」
　現在の鮎釣りは、漁協による稚魚放流で成り立っている。河口で孵化し、海に下って、次の春に川を上るという天然鮎の生活パターンは、 堰堤(えんてい) とダムでずたずたにされているからだ。この香美川は、幸いにも母なる海と、細々と手をつないではいる。とはいえ、このあたりでは胸まで立ちこんでも足が見える香美川の純粋も、河口では踏みにじられる。天然遡上の鮎は年々減少していく。一シーズンの鮎釣りを支えるのは、漁協が計画的に放流する稚魚だ。したがって、その稚魚の放流場所、放流時期の判断の良否によってその年の鮎の成育が決まる。鮎師の幸不幸も決

まる。
　不漁が続くと、高い入漁券を買って釣りに来ている鮎師たちは、自らの腕の悪さを棚に上げ、漁協の放流計画を責めることもしばしばある。
「しかしなあ流介、どんな年でも鮎はいる。釣れないのは、そいつの目と腕が悪い。流れを見て石を見てオトリを追い気のある野鮎に近づける腕さえあれば、鮎を釣るのは簡単じゃ。生娘のように細心にオトリをあやつって、夜這いのように大胆に、野鮎を引っ掛ければよい」と古屋が、菅笠の下で鋭い目を光らせた。
「出ましたな、師匠の持論が。俺たち、女性経験の少ない若造には、もう一つ分かりにくいんだけど……」流介が切りかえす。
「とぼけやがって」
　川原で師弟が笑い転げている。
　充実した気分で川を眺めていた二人の後ろで、エンジン音が響いた。
　黒いランドクルーザーだ。流介は、見覚えがある。ブラインドカーブで追い越しをかけた想像力の欠如した連中だ。
　車から降りてきたのは黒いヴェストで身を固めた三人の男たちだった。ロックン・ロック社の竿を持っている。
　流介は心の中で舌打ちをした。
「おい、ここは素人が多いぞ。まだまだ追い気のある鮎がいそうだぜ」
　坊主頭の大男がでかい声でしゃべりながら流れに向かっていく。あとに続く二人は、とろんとした目の小太りで背の低い男と、鳥ガラのようにやせた長身の男だ。どこかで見た宇宙活劇映画のロボット二人組のような、でこぼこコンビだ。
「ボス、これはラッキーポイントみたいですなあ」
　小太りの方が、特大のオトリ缶を重そうに運びながら言う。
「ボス、あそこの二つの岩の間、入れ掛かりですよ」
　長身の男がへつらうように言いながら、双子岩ポイントに強引に割りこんで行く。先程まで流介と古屋が釣っていた場所では、三人の釣り人が竿を出していたが、おかまいなしだ。
「何だ、あいつらは。香美川では見かけない連中だな」
　古屋が吐き捨てるように言う。
「俺は、今朝会ってますよ。もっとも二度と会いたくないと思っていましたがね」
　流介も不快感をかくさずに言った。
　釣師という人種は、本質的にはエゴイストで、心の底では自分さえ釣れればいいという欲望を持っている。しかし、その欲望をオブラートに包んで、いかにソフィスティケートされた世界を楽しめるかどうかで、その釣師の成熟度が分かる。文明の歴史と同じだ。
　流介も古屋も、この黒ヴェストの男たちのような野蛮な釣師を見ると、目を背けたくなる。
「師匠、どうします。鮎師の仁義を教えてやりますか」
「いや、竿を見る限り、連中も素人ではないぞ。解禁日で、ちょっとばかり、はしゃぎすぎているだけだろう。わしらは、もう少し下の方で釣ろうや」と古屋が答える。
　二人は、竿を担ぎ、双子岩の下のトロ場に向かった。
　速瀬が終わり、水深が深くなってゆったりとした流れになったところ、いわゆるトロ場は、流介の得意とするポイントだ。繊細で正確な操作で、流介のオトリは、糸がついてないように泳ぎ始めると、順調に野鮎を掛けてくる。
「どけ、どけ、でかいぞ」
　突然、上のほうからダミ声がすると、黒ヴェストの男たちのボスが、野鮎に引きずられて下ってきた。男は、強引に流介の前まで入ってくると、ようやく引き抜きの体勢になる。
「よっしゃー」
　いかにも硬そうな竿を片手で構えて、一気に抜くと、オトリの倍はありそうな野鮎がどさっと重量感あふれる音を立てて、男の玉網に納まる。
　力まかせの技だが、この男、そうとう腕が立つ。流介の視線を意識して、男が振りむいた。

「この川には軟弱な鮎師しかいないと思っていたが、兄さん、かなり掛けてるようだな」
　男の声は、酒と塩で鍛えられた荒海の漁師のようである。
「お言葉はありがたいんですがねえ……お宅の硬派の技で、このトロ場の気の弱い鮎たちは、すっかり散ってしまいましたよ。香美川の鮎たちは、がさつな男が大嫌いでね」
　流介は、物静かな声に怒りをこめた。
　川からあがれば、アルマーニのスーツがよく似合うスマートな流介と、「いつでもどこでもスウェットスーツ」のような大男が目を合わせる。その四角い顔の細い目がせいいっぱい開かれた。
「兄さん、ずいぶんいかしたスタイルだが、名前、聞いとこうか」
「河原流介だが」
「お持ちの竿は、アルティザン社のハイパー・ストリームか。ナンパ野郎にお似合いだぜ」
　流介の竿に粘っこい視線を送りながら、男が言う。
「人と挨拶するときは、まず自分の名前を大きな声で、はっきり言いましょうと、幼稚園の先生に習わなかったのかな」
「ファハハハハァ……兄さん言うねえ。俺は笹山巌（ささやまがん）。九鬼川では、少しは知られた顔だがな」
　その男、笹山の大声を聞きつけて、黒ヴェストの二人も他の釣り人を押しのけ、バシャバシャと川の水を蹴散らしながら近寄ってきた。
「ボス、どうしました」と小太り野郎が叫ぶ。
「もめ事ならまかせてください」鳥ガラ男が続けた。
「何でもねえよ。この川にも、ちょっとは骨っぽい兄さんがいたんで挨拶しているだけさ」　笹山は、貫禄を示す。
「こいつらは、権藤と片桐。俺たち三人で、ロックン・ロック社のアドバイザリー・スタッフをやっている」
「何だ、おめえは。ボスに文句があるのか」
　小太り野郎の権藤は、とろんとした目の割には気が短そうだ。
「俺たちゃ、ロックン・ロック社の看板鮎師だぜ」鳥ガラ男の片桐も突っかかる。
　険悪な雰囲気に気づいた古屋が、寄ってきた。
「流介、なにごとだ」菅笠の奥の目が鋭くなる。
「何でもありません、師匠。鮎よりも縄張り意識の強い連中に挨拶しているだけです」
　流介はつとめて冷静な声で答えた。
　笹山は、鮎と染めぬかれた古屋秀次の菅笠をじっと見つめる。
「お前さんが、『菅笠の秀』か。香美川に来ればいつかは会えると思っていたが、手間が省けたぜ」
「あんたは」古屋は、笹山の目を見てたずねる。
「俺は、笹山巌。九鬼川の調子が悪いんで、今シーズンは香美川に鞍替えしようと思っている。よろしくな」
　九鬼川というのは、流介の住む街から香美川とは逆の、北に位置する川だ。この地方では、香美川とならんで鮎の名川として知られていたが、今年は異変が起きていた。原因不明の水質悪化で、鮎の稚魚たちの姿が見られなくなったのである。
　鮎は生まれ育つ川の水質に敏感に反応する。清流の女王としてのプライドが汚れた水を許さないのだ。
「九鬼川のことは、組合から聞いている。鮎で食っている人たちには、大変な打撃じゃろう。だがな、香美川には香美川の鮎師がいるんじゃ。お互い楽しんで釣ることを考えた方が良い」
　古屋は、流介から笹山巌にゆっくりと視線を移しながら言った。
「それはそうだ。素人さんには大いに楽しんでもらわなくちゃな。しかし、俺たちはプロだぜ。俺たちの鮎釣りは遊びじゃねえ……」
　うそぶく笹山の言葉を、流介がさえぎる。
「遊び心を失ったら釣りじゃない。漁だ。確かに俺たちは、夏の間、鮎釣りを職業にしているが

、それは鮎釣りが好きでたまらないからだろうが。自分勝手な真似をして川を荒す連中は、香美川から出ていってもらいたいな」
　流介の勢いに、権藤と片桐が飛びだしそうになった。
「待て」
「待ちな」
　古屋秀次と笹山巌が同時に言った。
「兄さん、今日は解禁日だ。そろそろ、釣りに戻ろうじゃないか。俺のオトリは、泳ぎたくてむずむずしているぜ」
　笹山が、いきり立つ権藤と片桐を制止しながら言う。
「菅笠の秀さん、勝負は鮎釣り大会までおあずけだ。俺たちはロックン・ロック、あんたたちはアルティザン。リバーラン・カップでは、いやでもまた顔を合せることになるだろう。その時を楽しみにしてるぜ」
「流介、お前もひけ。もめ事は、川の外の世界だけで充分じゃ」
「すみません、師匠。つい熱くなってしまって……」
　流介の腰につながれた曳き舟の鮎がぱしゃっと跳ねたのをきっかけに、男たちは上と下に分かれていく。
　男たちの長い竿が風に揺れる。それは、各々の傑出した力量を誇示する旗竿のようだ。
　河原流介二七歳の夏の始まりだった。

2

　歌が聞こえる。川に立ちこんで、ひたすら鮎を泳がせているとき、流介の頭の中では、メロディが流れている。
　その歌は、あるときは童謡であったり、ポップスであったり、クラシックであったり様々である。
　銀色のヴェストを着こんだ流介は、今日も気ままに浮かぶメロディを心で追いながら、オトリ鮎をコントロールしている。
　解禁日からそろそろ一ヵ月半。梅雨はようやくあけそうだ。まぶしい朝に、愛竿ハイパー・ストリームがすっくと立っている。
　ほぼ毎日、川に立ちつづけた流介の顔は、たくましく日焼けしている。
　流介の竿を出している場所は、今日もトロ場だ。今シーズンの流介は、意識してトロ場の泳がせ釣りをしている。狙いはリバーラン・カップである。
　腕に覚えのある鮎師が参加するリバーラン・カップは、この地方でもっとも権威ある鮎釣り競技会だ。主催は流星新聞社のスポーツセクション。協賛は、アルティザン社とロックン・ロック社をはじめとする釣り具メーカーと香美川が流れる地方の観光課だ。大会は毎年八月の始めに行われる。
　その時期の香美川は、意地っぱりの太陽が頑固に照りつける。水量が減り、すっかり細くなった川では、鮎から人間が丸見えだ。そのうえ解禁以来、鮎師に責めたてられた魚たちの学習効果もピークになる。生半可な技は通用しない。そうなったら自分の得意技にこだわる方がいい。
　優勝を狙う流介は、徹底的にトロ場の泳がせ釣りにこだわった。
　友釣りといえば、速い流れの瀬で釣るものと固定観念にとらわれている鮎師も多いが、最近の友釣りは昔ながらのやり方では通用しなくなっている。時代は変わる。釣りも変わるのだ。
　鮎釣りに限らず、釣師は無念無想で釣り糸を垂れているとよく言われるが、それは釣りをしたことのない人間の偏見である。流介に言わせれば、釣師、特に鮎師の頭の中は魑魅魍魎（ちみもうりょう）、想念雑念のラッシュアワーだ。オトリ鮎はどう泳いでいるか。仕掛けは流れに合っているか。くそっ、隣の奴また掛けやがった。自分だけが掛からないのはなぜだ。深いのか、浅いのか、右か、左か。
　それらの魑魅魍魎をねじ伏せるために、流介は頭の中に浮かんだメロディを追う習慣がついた

。他人を気にせず自分のペースを守るには、これがいちばんだ。
「イマジン・オール・マイ・アユ〜」
「流介ーえ、河原流介ーえ。おおーい」
　耳になじんだ声が、せせらぎと風の音を越えて聞こえてくる。
「おおーい、鮎師の流介ーえっ」
　ころころとはじけるように心地いい声は、緑川彩（みどりかわあや）だ。
　彩は流介の住む街の高校教師だ。生物を教えていて野鳥と草花にくわしい。流介と知り合ったのは、彩が香美川にバードウォッチングに来ているときだった。同じ街から香美川に通うもの同士と分かった二人は、鮎と水のように親しくなった。
　ショートカットにオールドファッションの麦藁帽子がよく似合う彩は、流介とはおない年で同じ学年で育ったはずなのに、わたしゃあんたより十ヵ月も年上だからね、と早生まれの流介をいつも馬鹿にしている。
「よくここにいると分かったな」流介は、竿を構えたまま言う。
「真っ赤なチェロキーに乗った鮎師が、この香美川に二人いるとでもいうのかな」
　彩は川辺に立って、いたずらっぽい笑みを浮かべていた。
「この不良教師め、今日は水曜日だぞ。学校をふけてきたな」
「わたしゃ聖職者だよ。尊い職業の人間には、夏休みというお恵みがあるんだ。まいったか、アハハハ」
　彩が笑うと、夏の風も気持ちよさそうだ。流介も笑みを浮かべて言う。
「まいったよ。鮎師に休日なんぞないから、そんな習慣忘れていたよ。で、どうしたんだ、先生様。迷える鮎師にご高説を垂れに来たのかな」
「バカタレ、そんな暇はない。今日は久しぶりに釣れたての鮎を食いたくてわざわざ来てやったのよ。ちゃんと釣れてるんでしょうね。わたし、朝ごはん抜きで来たの」
　彩は、ようやく女言葉になって、肩にかついだクーラーを下ろす。素足にはいたスニーカーを、透明な水と遊ばせる。
「おっと、お客さん。この河原流介の鮎はそこらのスーパーで売っている養殖鮎とは、わけが違うよ。日本一うまい香美川の鮎でしかも背掛かりばかり。杉山オトリ店に持っていけば、最高の友鮎として大歓迎。高級料亭もよだれを流して待っている代物だぜ。そう簡単には渡せないな……」
「これでもか」
　ごちゃごちゃ言ってる流介の言葉をさえぎって、彩はクーラーから、きりきりと冷えた白ワインを取りだした。
　渇ききった流介の喉には、強烈なプレゼンテーションだ。
「さらには、こうだ」
　ソウメンの束を握った彩の手を見て、流介の胃袋が勃起する。
「分かったよ、彩。もうひとつ掛けたら上がる。今日一日のオトリは充分確保したから、いやというほど食わしてやるよ。早くお湯を沸かして、ソウメンをつくっておくれ」
　その一尾に苦労した。
　川原で火を起こし、昼食の準備をしながら流介を見つめる彩の視線がこそばゆい。何度か追いを感じたが針掛かりしない。ようやく掛けた一尾は、引き抜きの時、玉網の枠に当ててバウンドした。はねた鮎を慌てて受けようとする流介のヘッピリ腰に、彩の澄んだ笑いがとんだ。
「アハハハ、猿も木から落ちる。流介も鮎を落とす。アハハハ」
「お前の誘惑に心が乱れちまったぜ。まったく、人の弱みにつけこんで……」
　どうにか一尾を取りこんで流介が上がる。
「流介の弱みは、ワインかな、ソウメンかな、それともこの私かな」
「最後のものを除くふたつだ」
　流介は、照れたような微笑みを浮かべて、彩の大きな瞳を見つめた。最後のやつは暗くなってからだ。

　流介はオトリ用にはでかすぎる鮎を選んで、じっくりと焼きあげた。竹串に刺した鮎から、脂がしたたり落ちる。
「それにしても、草しか食べてないくせに鮎ってどうしてこんなに大きくなるんだろうねえ。それに天然物は養殖物と違って、妙に人間みたいな太り方をしないしさ……」
　大胆に鮎をかじりながら、彩が言った。
「おや、緑川先生、ごぞんじない？　生物の先生なのに、困ったもんだ。鮎の食べる珪藻は高タンパクの健康食品なんだぜ。その上、この急流で一日中泳いでたら、筋肉の成長も早いさ。スマートなスタイルのままぐんぐん、でかくなっていくのも当たり前だろ。運動不足の上にジャンク・フードばかり食べて、ぶくぶく太る人間や養殖物とは違うさ」
「ふーむ。この香美川は、効率のいいアスレチックジムで、栄養バランスも抜群ってわけか」
「鮎にはな」
「よし、私も鮎を見習って泳いでみるか」
　いきなり立ち上がってＴシャツを脱ごうとする彩に、流介がとまどった。
「よせ、彩。水着、着てないんだろう。よせ、この尻軽女。ここはヌーディスト・ビーチじゃないんだ」
「あわてるなよ、流介。そう簡単にこの柔肌を見せられるものか。まっワインでも飲んで落ち着きな」
「まったく……」
　白ワインを飲みほして、流介が苦笑する。
「今日は菅笠の先生はどうしたの」
「師匠は杉山のおっちゃんと、アルティザン社に行ってるよ。リバーラン・カップの打ち合わせさ」
「アルティザンって、流介と先生の竿を作っている会社でしょ」
「そう、だから俺も師匠も毎年、必死になって頑張ってるのさ」
　現在の鮎釣りは、釣具メーカーのハイテク競争でもある。竿は強く、細く、軽くなっていく。糸は合金と繊維の新素材になり、強度実験をくり返している。
　毎年モデルチェンジする竿には、一流の鮎師たちの意見が多く取り入れられている。実験室のデータだけでは得られない感覚的な問題は、本物の鮎に聞くしかない。流介たちアドバイザリー・スタッフは、ハイテク・サバイバルゲームの最先端にいるわけである。
　アルティザン社は、モデルチェンジのためのモデルチェンジをするメーカーが多い中で、どこよりも鮎師の意見を取り入れてリーズナブルな製品開発を続けていた。
　リバーラン・カップのような競技会で優勝することは、鮎師たちの頂点に立つことであり、その竿の優秀さを証明することである。流介と古屋にとっては、二重の意味で負けられない大会だ。
「ここんとこ、師匠が優勝、俺が準優勝という線を守っているんだけど、ライバル社の連中も腕をあげているからなあ」
　久しぶりにのんびりした昼食後の充実感を楽しみながら、流介が彩に言った。
「ふーん、たかが、お魚遊びと思っていたけど、鮎師もけっこう大変だねえ」
　彩が、流介の横顔を見つめながら言う。
「そうさ。だから、今晩あたりたっぷりとなぐさめておくれ」
「バカタレ、調子に乗るんじゃないの」
　後ろで束ねた流介の髪をグイとつかんで、彩が言いはなつ。
「この一っ、暴力教師！」
　川辺ではじける二人の上を、風が通りすぎていく。
「よお、流介。川原はお前らだけのものじゃないんだ。ちっとは遠慮していちゃつけよな」
　突然後ろからとんで来たダミ声は、笹山厳だ。
「なによ、このおっさんは」
　坊主頭の大男に、さっそくかみつこうとする彩を、流介が制した。

「お宅こそ、とっくに九鬼川に帰ったと思っていたのに、まだ香美川に未練があるんですか」
「今年の九鬼川はもうだめだ。水が濁ってどうしようもない。川のことを何も知らない馬鹿どもが、上流にゴルフ場をつくったからだ」
「そいつはご愁傷様ですが、香美川の流れはきれいすぎて、お宅にはちょっと似合わないと思いますが……」と流介が言うと、彩が続ける。
「そうよ、この川はゲスなものは何でも流してしまう癖があるから、気をつけた方がいいわよ」
「ファハハハハァ、いいねえ香美川は。水はきれいで、ねえちゃんもきれいだ。おい流介、紹介しろや」と厳はふてぶてしい。
「緑川彩」流介はぶすっとしながら言う。
「で、このおっさんは」彩がつっかかる。
「笹山厳大先生。ロックン・ロック社の回し者さ。一応ライバルってことになりますかな」
「ねえさんよお、今年のリバーラン・カップは、見物に来ないほうがいいぜ。無様な負け方をする流介を見たら、百年の恋も冷める」
「大きなお世話よ。流介があんたなんかに負けるものか。流介、今すぐ勝負しなさい」
　彩が大きな目を輝かせて、流介をたきつける。
「そいつは面白い。手っ取りばやく、二尾早掛けでどうだ」
　厳がのってきた。
「いいだろう。今日は釣り人も少ないし、そっちの下品なでこぼこコンビのお供もいないようだからちょうどいい」
　流介が受けてたつ。
　二尾早掛けとは、競技会の一位と二位が同尾数で決着がつかなかったときの、プレイオフの方法である。用意、スタートで早く二尾掛けた者の勝ちだ。
　二人は、それぞれのオトリ缶から元気のいい鮎を選びだすと、川に入った。流介はトロ場に急ぐ。厳は荒瀬である。
　流介は、鮎の気持ちになってオトリをコントロールする。そうだ。そっちに泳げばいい岩がある。もう少し頑張って、いい野鮎を連れて来てくれ。
　ブルブル、ガツン。狙いどおりだ。
　きっちりとハイパー・ストリームを立てて、抜きあげる。一尾目を取りこんだ流介は、厳のほうを見る。
　黒いヴェストの厳も、独特の片手抜きの体勢に入っている。荒瀬から二尾の鮎を抜きあげるために、剛竿のパワーを最大限に生かしている。
　スパーン、厳の玉網がいい音を立てた。
　流介が交換したオトリは放したとたん、矢のようにさっきまで泳いでいた岩の回りにすっとんで行く。自分の縄張りを取りもどそうとする鮎の習性だ。
　再びオトリの動きに精神を集中する流介に、彩の視線が熱い。
　厳は新しいオトリを使って、ますます流心に立ちこんでいく。
　流介と厳では、鮎釣りのスタイルが違い、竿の機能も違う。流介の釣りは、ある程度オトリの自由意志を尊重しつつ、イメージとテクニックで狙う場所にオトリを誘導するものだ。その愛竿、アルティザン・ハイパー・ストリームは軽くて敏感でオトリの動きが手に取るように分かる。
　それに対して、厳のロックン・ロック社の竿は、ひたすらパワーを重視して作られている。瀬にオトリを強引に沈めるスタイルの鮎師が好む竿だ。少々の重さは腕っぷしでカバーする。
　どちらの竿と釣り方にも哲学があるが、流介は、アルティザンの竿を使った自分のスタイルが、これからの鮎釣りだと信じていた。
　二人が二尾目を掛けたのは、ほぼ同時であった。流介は流れるような動きで引き抜き、野鮎が玉網に吸いこまれる。
「やったあ、流介の勝ちだあ」彩の声がはじけた。
　厳の方は苦戦していた。掛けた鮎がでかすぎて、引き抜きに時間がかかっている。ようやく取りこんだときには、流介は勝ち誇った表情でもう岸に向かっていた。

その流介に、聞き慣れた声がかかった。
「流介、早さはお前の勝ちだが、鮎の型では厳のものだ。この勝負、引き分けだな」
川辺にいつのまにか現れた古屋が、腕を組んでいた。
「師匠、いつから見てたんですか。杉山のおっちゃんまでいっしょに……」
「流ちゃん、リバーラン・カップの小手調べかいな」
香美川でいちばん古いオトリ屋の杉山が、関西なまりで言う。
「そうなんだ、おっちゃん。おっちゃんが見物しているのなら、もっと早く勝負を決めるんだったよ」
「流ちゃんの釣りも、ますます磨きがかかってたいしたもんやけど、あの笹山はんもすごいで。これは、えらい強敵や」
「大丈夫よ。私の流介が、あんな不細工な男に負けるもんですか。顔を比べたらわかるでしょう」
彩がチャチャを入れる。
「おいおい、お嬢さん。釣りは顔じゃない。腕だぜ。この優男と俺を比べてみな」
川から上がってきた厳が、右腕の筋肉を盛り上げて見せた。冬場、山仕事で鍛えている厳の腕は、流介のそれとは比べものにならない。
「まあまあ、それぐらいにしておけ。あとは本番で決着をつけたらいい」
古屋が分けて入った。
「そうや、いよいよリバーラン・カップの段取りが決まったで」
「おっちゃん、場所はどうなった」
「 東雲橋(しののめばし) や。決勝戦は八月九日。予選は八月六日。大会本部はいつものように杉山オトリ店。流ちゃんきばってや」
「東雲橋なら、トロ場も荒瀬もあるから、二人の勝負の場所としては絶好だな」
古屋の言葉に、流介と厳の目が光った。
「おいおい、二人ともこの菅笠がいることも忘れるなよ。まだまだ老いぼれちゃいないぞ」
「師匠はともかく、このロックン・ロック野郎にだけは、負けたくないですね」
流介が意気ごむ。彩がうなずく。真夏の太陽が容赦なく照りつける川原で、流介と厳の視線がからみ合う。お互いのプライドをかけて、鮎師としての力量が試されるのだ。
河原流介、古屋秀次、笹山厳、三人の鮎師の間を強い谷風が吹き抜けた。風にのって、一羽のトンビがゆったりと舞う。

3

峠道を越えて香美川が見えてきたとき、流介は大きく息を吸いこんだ。助手席の彩の香りと、真夏の濃密な木々の香りがブレンドされて、眠気をふきとばす。
ジープ・チェロキーが風を切る。杉山オトリ店までもうすぐだ。
それにしても、夕べはちと張りきりすぎたかな。
久しぶりに流介の部屋に来た彩と、まずマックのデータベースを見ながら、今シーズンの釣果を検討した。
流介のもう一つの顔はデジタル・デザイナーである。しかし鮎釣りのオン・シーズンは仕掛け作りが忙しく、ほとんど仕事はしない。
鮎竿を設計するコンピュータはあっても、鮎を釣るコンピュータはないぜ。
流介の口癖であるが、因果なもので、ついつい鮎釣りの世界もデータ化したくなる。釣行日の尾数、天候、場所、同行した釣友、場所などを入力し、どんな条件でどんな風にオトリ鮎を泳がせれば掛かるかが、精密な情報になっている。カラー・ディスプレイに流介自慢の香美川精密図を映しだしながらシミュレーションすると、実際に釣りをしている気分になる。
彩と一緒の日には釣果が伸びていない、あんたは疫病神だな、と言うと手痛いがうれしい反撃が待っていた。

　ワインを飲みながらさんざん戯れて、眠りについたのは早い夏の朝が白々と明けるころだった。
　鮎以外の柔らかいものに触ったのは、何カ月ぶりだったかな。
　ステアリングを握りながら彩を見つめる流介は、照れたように微笑んだ。
「なにニヤニヤしてんのよ、バカタレ。気合いいれなさいよ」
　大きな瞳に、睡眠不足は関係ないようだった。女は謎だ。
「あーあ、こんなにお天道様が高くなってから出勤するようじゃ、鮎師失格だぜ。私生活に問題ありだな」
「勝負の世界は厳しい。みだらな欲望は、持てる能力を抹殺する。ゆえに緑川彩は、一夜を犠牲にして、汝のためにつくしたのだ」
　こいつにはかなわない。ああ言えばこう言う能力は天才的だ。流介は彩と口で対抗するのは諦め、今日の釣りに心を切り替えようとする。
　リバーラン・カップまであと半月。雨は全く降らず、川は細くなっていくばかりだ。
　ますます釣りにくくなっていくなあ。そろそろ師匠とも、最終的な作戦を考えないと……。
　流介の思いは、杉山オトリ店の前の、異常な人だかりで中断された。朝というよりも昼に近い時間である。普通なら鮎師は皆、川に出はらっている頃だ。ロックン・ロック軍団の黒いランド・クルーザーも停まっている。
　杉山オトリ店の前には大きな水槽があり、友鮎が元気に泳いでいる。そのガラスを震わすような大声は、笹山厳だ。
「何だと、コノヤロー！　お前さんたちの寝言なんか聞きたかねえ。さっさと帰んな」
　人だかりの中心にいるのは、この暑さの中でネクタイを締めた二人である。香美川には場違いなスタイルだ。太陽にあたったことのないような青白い顔をした男と、脂ぎった顔の太めの男が、鮎師たちに取り囲まれている。
「カエレ！　カエレ！」
　周りの鮎師から、カエレコールが始まった。
　チェロキーから降りた流介は、彩と顔を見合わせる。いったいどうなってるんだ。あの人のいい杉山のおっちゃんまでが興奮してるみたいだぜ。
　流介は、古屋の姿を探した。
　ネクタイの二人を取り囲んだ輪から少し離れて、古屋は腕を組んだまま、騒ぎを眺めている。そのいつになく厳しい視線が、流介をとらえた。
「来たか流介」
「師匠、あの二人は何者ですか。みんな、ずいぶん怒っているようですが……」
「流ちゃん、聞いてくれ。しょうもない野郎たちやで」と杉山が割りこむ。
「こいつら、建設省の役人と土建屋や。涼しい顔してとんでもないこと言うとる」
「いったい、どうしたんですか」流介がたずねる。
「この香美川にダムをつくりたいので、釣りをなさる皆様のご意見をおうかがいしたい、とぬかしてけつかる」杉山の額に汗が光った。
「えーっ、なんでそんなものが必要なのよ」
　彩がネクタイの二人につっこむ。
「この香美川の洪水調整と河川維持用水の確保を主眼とする多目的ダムの建設が、このたび水資源開発公団で決定いたしまして……」
　ネクタイに締めつけられた首の窮屈そうな男が、脂ぎった顔で平然と答える。
「これは、いわゆる公共の利益にかなう、この香美川地区の将来を見据えた総合プロジェクトの一環でございまして、可及的速やかに実現したいと考えております」と青白い男がつけ加えた。
「ちょっと待ってくれ、あなたたちはこの国の川が、ダムによってどんなに痛めつけられているか、分かっているのですか」流介の声に怒気がまじる。
「上から読んでもダムはムダ。下から読んでもダムはムダ」彩が絶妙なフォローをする。
「お前さん方、三十年前の香美川を想像することができるかい」

　落ちついた声で古屋が話し始めた。
「手ですくえば、水がそのまま飲めて、瀬が瀬であり淵が淵であった頃の香美川。ほれぼれするような岩が川底に敷きつめられていた香美川。想像することはできんだろう」
　流介の視線を受けとめながら、古屋が続ける。
「流介などは、今の香美川だって充分きれいだというかもしれんが、昔はこんなものじゃなかった」
「土建屋が好き勝手に川をほじくりよったさかいなあ」杉山がため息まじりに言う。
「護岸工事のための護岸工事、川をいじくることだけが目的の改修工事。川を金儲けの道具にしか見ていない奴らの仕業ですね」
　流介はネクタイの二人をにらみつけた。
「もうひとつ、川をごみ捨て場と思っている都会人、粗大ごみを川におっぽりだす村の人たち」彩が続ける。
「極めつけがダムってやつよ」
　ひときわ目立つ声は厳のものだ。
「俺たちのホームグラウンド、九鬼川が死にかけているのも、元はと言やあ、最上流にできたダムのせいさ。何だかんだときれい事を並べられて、住民たちは補償金もらって川を売っちまった」
　水槽の鮎たちが、じっと鮎師たちの会話を聞いているようだった。
「川のど真ん中にコンクリートの固まりをつくる工事のために、川は荒れ放題。そしてダムが完成すれば、たまった泥水が川を濁らせ、その泥水といっしょに運ばれる土砂が川を埋めていく……」と流介が言う。
「流介の言うとおりだ。あげくの果てに今度はゴルフ場までつくりやがって、九鬼川はもう鮎の住める川じゃなくなった」厳が流介に合わせる。
「でもあのゴルフ場はいいゴルフ場ですぜ」
　厳の取りまき、小太りの権藤が言う。鳥ガラのような片桐がうなずく。
　その二人に彩が反発した。
「お前らゴルフなんかやるのか。ゴルフ場の目に鮮やかな芝生のためにどれだけの農薬が川に流れこんでいるか考えたことあるの」
「そ、それは……」権藤は、長身の片桐の背中に身を隠そうとする。
「ちょっと厳のお兄さん、何でこんなつまんない奴らと付き合っているのよ。もう少し友達を選びなさい」
　彩の追求に、でこぼこコンビは、媚びるようにボスの顔を見た。
「川は人間だけのものじゃないの。森や生き物たちにとっても、川はかけがえのないものよ。森は雨水をため、土と岩がそれを清めて川に流す。虫も魚も鳥も、その川とともに育ち、森を大きくするお手伝いをする。人間の身勝手で川をいじめたら、必ず仕返しされるわ」
　むっとした熱気が、鮎師と鮎師たちの敵を包みこんだ。たじたじになった役人と土建屋がこそこそと後ろを気にし始めた時、ぽつりぽつりと冷たいものが首筋に落ちてくるのを流介は感じた。
「ちくしょう、降って来やがった。こいつらのせいで香美川も怒ってきたみたいだぜ」
「それでは皆さん、またあらためて」「失礼します」
　役人と土建屋が、黒いベンツで逃げだすと同時に、ザアーっと雨足が強まった。深い山の中をぬって流れる香美川は、天候の変化が激しい。男たちは杉山オトリ店の中に逃げこむ。
　今日は釣りにならないぜ。流介は雨空を見つめた。
「流介、俺はもう帰る。だがな、ダムはダム、勝負は勝負。忘れるなよ」
　厳が大声で怒鳴りながら、権藤と片桐の待つランドクルーザーに向かった。
「覚えているさ」流介が答える。
「それにしても厳(がん)さんよお。何であの権藤と片桐みたいな質の悪い連中とつるんでいるんだい。お宅にあいつらは似合ってないようだが……」

振りかえった厳は、この大男にしては珍しくちょっと恥ずかしそうな表情で細い目を伏せた。
「しょうがねえんだ。俺は車の免許を持ってねえんだ」
すたすたと歩き去る厳の後ろ姿を見つめながら流介は、吹きだした。

雨、雨が降る。
香美川の雨は、それから五日間降りつづいた。天気予報は大型台風の襲来を告げている。つい先日まで、やせ細った川を嘆いていた鮎師たちは怒涛のいきおいで流れる川筋を見て、大きなため息をつく。水が少ないと言っては天を仰ぎ、水が多すぎると言っては、うなだれる。鮎師の悩みはつきない。
降れば土砂降りだぜ、まったく。流介は、濁った川を眺めながら、今日も杉山オトリ店にいた。
「こういうこともある。まあのんびり仕掛けでもつくることだな」
古屋はさすがに年の功である。
「ですが、師匠、このままだとリバーラン・カップまでには、香美川の鮎はみんな流れてしまいそうですよ。俺の二七歳の夏は一度しかないんですよ」と流介が言う。
「毎日竿を出してないと、勘が鈍ってしまいますよ。どうも気分が憂鬱になって仕方ありません」
「竿が出せないときは、出せないときの過ごし方があるもんだ。おーい、おっちゃん、酒を二杯くれ」と古屋は、奥の間にいる杉山に呼びかけた。
「わたしもお相伴しまっさ。どうせ今日は商売にならへんから」
杉山はコップを三つと、一升瓶を運んできて、そのまま腰を落ちつける。
雨の日の、鮎師たちの宴が始まる。やれ仕掛けがどうの、あの日あそこでバラした鮎は本当にでかかったのと、三人の会話はそのまま釣り雑誌に載せても、それなりの座談会記事になるほど興味深いものだった。
雨はますます激しくなる。すっかり暗くなった空で、稲妻が山々の稜線を切り裂いた。
「おーっ、雷まできよった。こりゃ竿だしたら、いっぺんに感電してしまうで」
最近の鮎竿はカーボン素材を使っているため、通電性がきわめてよい。しかも、十メーターに近い長さがあるから、広い河原では避雷針を持ち歩いているようなものだ。だから、鮎師はみんな雷鳴には敏感で、すこしでも音が近づいたら、すぐに竿をたたむ。
「しかしなあ、おっちゃんもよく知っているように、鮎というのは天候の変化に敏感で、雷の鳴り始めなどに妙に釣れることもあるぜ」
古屋が、愛竿を磨きながら言う。
「そうや、もう二、三年前の話やけど、香美川によく来ているじいさんが、この前の瀬で釣っておって雷が鳴り始めたんや。もうやめよ、もうやめよ、と思ってもなぜか次々に掛かって竿をたためなんだそうや。そのうち、案の定、どかーんときて、びりびりーや。あっ、いてもうたとおもったけど、ほんまに軽い感電やったらしくて、身体はどこにも異常がなかったらしいんや。それどころか、持病の神経痛がすっかり治ったいうて、じいさん喜んどったわ」
杉山が大きな身ぶりで話し終わると、鮎師たちの笑い声が、雨の音に負けないくらい響きわたった。
それにしても、と酒を注ぎながら、流介が真顔に戻る。
「俺たちってどうして、そこまでして釣りたいんですかね。いくら釣りが好きでも、鮎と心中しそうになることはないのに」
古屋は黙ってコップの酒を飲みほした。
「釣師はみんな心に傷があるから今日もまた釣りに出る。ただし、彼はその傷が何であるかを知らない……こんな言葉がありますよね」
流介は、冷や酒が胸の奥の深いところで、キューッと広がるのを感じた。その酒がますます流介を饒舌にする。
「釣師というのは、満たされない思いを抱きつづけている人種じゃないかな。釣師というのは、

中国の墨絵のような、悟りを開いた世界とはほど遠いですよね。釣師は、欲望と嫉妬と煩悩の固まりなんだ。ねえ、師匠」
「ほー、そうかね。ワシらにはもう、そんなドロドロした気持ちはないようだが」
　古屋がとぼける。
「へえー、そうですか。去年あたりから俺が師匠に勝つ時もたまにあるけれど、そんな日には、口と態度が全然違いますよ。流介、成長したな、と誉めてはくれるけれど、帰りの宿でどんなに機嫌が悪いか、師匠ったらさっさと寝てしまいますよ」
　ここぞとばかりに言葉を重ねる流介に、古屋は雨を見つめる。思い当たる節があるのだろう。
「それに、師匠の例の口癖。俺がいかほど釣れましたかね、と聞いたとき、分が悪いといつも、数など忘れたと答えますよね」
　流介は、照れたような笑みを浮かべて、続ける。
「別に俺は師匠を責めているわけじゃない。ただ、釣師の精神分析をしていくと、ほんとにもう、一体どういう育ち方をしたのかと追求したくなることが多いと、こう言いたいんですよ」
「沈黙は金。ただそこに川があるだけ」
　古屋の一言に、雷が共鳴した。
　しゃべりながら、流介は友釣りを始める前の自分のことを考える。この香美川の清らかな流れに浄化される前の、自分で自分を持て余していた頃を思いだすと、布団をかぶりたくなった。
　友釣りの楽しさは、生命を関係づけるよろこびだ。
　鮎という生命をコントロールする。生命が生命を連れてくる。そこには掛け値なしの純粋な、生命と生命のコンタクトが存在する。この香美川で古屋に出会い、鮎の友釣りを覚えて、俺は人間関係のつくり方にも自信ができてきたようだ。自分自身との間合いもとれてきたような気がする。
　流介は、なんだかうれしくなって、思わず口元をほころばせた。
「どうした、流介。酔っぱらったか」古屋がたずねる。
「とんでもない、まだまだ、話はこれからですよ。ねえ、師匠、俺は一生鮎釣りを続けたいと思っていますからね。お願いしますよ」
　流介は、酒をあおって、勢いづく。
「そのためには、川がなくちゃいけない。俺はこの国の川を守るためには何だってやりますよ。鮎釣りのできる川があるのは世界中探しても、日本と朝鮮半島の一部だけなんだから」
「その貴重な川にダムを造ってめちゃらくちゃらにしよるやつらがおるで」杉山はロレツがまわらない。
「ダムなんか造らせない。川は流れてこそ、川なんだ」
流介の気迫のこもった言葉に、人生の大半を川に捧げてきた二人が、大きくうなずく。
　酒と遊ぶ三人は知らなかった。その頃、香美川を見おろす山腹のあちこちに長いレンズをつけた三脚が立ち、そのひとつひとつをヘルメットの男たちが取り囲んでいたことを。
　土砂降りの雨の中、ダム建設のための測量隊が動き始めていた。

4

　その日の夜が明ける。八月九日、東雲橋は、暗いうちから鮎師の熱気につつまれていた。
　早々と仕掛けをセットする者。サポーターたちに気合いを入れられる者。興奮を押さえきれず、やたらにはしゃぐ者。どの鮎師の顔も、掛けたばかりの野鮎のように輝いている。
　リバーラン・カップ決勝戦の朝だ。
　流介の心と身体も、銀色のヴェストの中で今にもはじけそうだ。長髪をいつもよりきつく束ね、サングラスの奥から、流れをじっと見つめる。あの岩の後ろでまず一尾、養殖鮎を野鮎に変えて手前のトロ場を泳がせれば、二尾は確保できるはずだ。流介は、イメージトレーニングで集中力を高めていく。
　香美川に照りつける太陽が、この日を待ちかねたようにエネルギーを全開する。河原には本部

のテントが設置されている。その前で、彩が主催者たちに混じってひときわ通る声で指示を出している。
　まったくあいつときたら、ボランティアのくせに、いちばん偉そうだぜ。流介は、彩の声をきっかけにイメージトレーニングを終了し、そのショートヘアーを目で追った。まあ、今日の勝敗はともかく、ゲームが終わったら、河原であいつのつくったうまいものを食いながら、気持ちのいい酒を飲めることは間違いない。
　流介は彩を眺めることで緊張感をほぐし、静かにゲームの開始を待っていた。
「よお、色男、試合の前に女は禁物だぜ。俺様との勝負で腰が抜けても知らねえぞ」
　大声は言わずとしれた笹山厳だ。その四角い顔に闘志をむきだしにしている。
「おはようございます。大先生、どうぞお静かに。なにせ、香美川の鮎は気立てが優しいので、先生のお声に怯えて食欲を無くし、お隠れになってしまうと試合になりません」と流介が切りかえす。
「隠れた鮎を引きだすのは、お前のスケの裸踊りじゃなくて、俺の腕だぜ」
　厳は細い目をめいっぱい開いた。
「まあ、お好きなように」軽く受け流す流介の後ろから、聞き慣れた声が届いた。
「さあ、二人とも無駄口はそれくらいにして、早くテントの方へ行け。トーナメントの抽選が始まるぞ」
　古屋が、菅笠をかぶりながら近づいてくる。
「師匠、いよいよですね。早くロックン・ロックの連中をかたづけて、師匠と勝負しましょうや」
「菅笠の秀さん、どうぞお手やわらかに。流介はどうでもいいが、秀さんは手強い」と厳も負けていない。
　水と油のような二人の鮎師は、まだ、舌戦をしながらお互いの愛竿を手に本部へ歩いて行った。
　リバーラン・カップ決勝戦は、一発勝負のトーナメント戦だ。アルティザン社の流介やロックン・ロック社の厳たちプロのシード選手と、厳しい予選を通過した一般参加者の計八名で争われる。予選は、三日前に五十名の鮎師が参加して行われた。香美川に集まった強者たちが激しいバトルを展開し、上位三名が選ばれた。彼らと、シード選手の流介と古屋、厳と権藤、リュービ社の林が決勝戦のメンバーである。
　そして今日は、朝の七時から準々決勝、準決勝、決勝と三試合をこなす。準々決勝と準決勝は二時間。そして決勝は三時間の長丁場である。勝負は、最初に受け取った二尾のオトリを加えた総尾数で決まる。シード選手といえども、ちょっとした油断が敗戦につながる。それがトーナメント戦の怖さだ。
　鮎釣り競技会は、自分との戦いだ。どんなに腕のいい鮎師でも、当日の天候、水温、水量などの諸条件によっては、鮎の釣れないこともある。そんなとき焦ってオトリ鮎に無理をかければ、最悪の結果を生む。悪条件の時はそれなりに川を読みきって、一尾でも多くの鮎をものにするのが栄冠への道だ。競技会だからといってオトリ鮎が張りきり、野鮎を掛けてきてくれるわけではない。すべては、鮎師のセルフコントロールの問題である。
　抽選の結果、流介と厳は準々決勝では、別のグループとなった。二人が順調に勝ち進めば決勝で顔を合わせる組み合わせだ。そして、古屋は準決勝で厳と対決する可能性がある。
「厳さんよ、せめて準々決勝は勝ってくれよな。それから準決勝で師匠にこてんぱんにやられちまいな」
　流介が組み合わせ表を見ながら言う。
「お前こそ、とりこぼすんじゃないぞ。アルティザン社のお偉いさんの前で大恥をかくのは、俺との決勝だからな」と厳は捨てぜりふを残して、ロックン・ロック社のサポーターの方へ帰っていった。
　そして、リバーラン・カップ決勝トーナメント開始のホーンが鳴った。鮎師たちはダッシュする。一尾でも多くの鮎を釣り上げるために。

流介の準々決勝の相手は、ロックン・ロック社の権藤だ。流介はこの小太りの男が嫌いだ。厳の細い目には、時としていたずらっ子のような可愛らしさが見えることがあるが、権藤のとろんとした目には、品性の下劣さが宿っている。
競技会は、前半と後半を分けて、境界線をはさんで上流と下流を釣る。下流に入った流介は、前半戦の終了までに八尾を掛けた。後半戦、上下を交代した後、流介は釣らずに川原から権藤の釣りを眺める。権藤にとっては大変なプレッシャーだ。
権藤の釣りは乱れに乱れた。試合終了直前、やっと一尾を掛ける。ようやくとりこんだそれは、なんと鮎ではなく、ウグイだった。コイ科のこいつは、友釣りの邪魔者だ。結果、流介は十尾、権藤はオトリのみの二尾。流介のパーフェクトな勝利だった。
そして、古屋秀次も笹山厳も、一般参加の選手を当然のごとく打ち破って勝ち進んだ。
「二人とそれから、おまけの一人もお疲れさま」
彩が、冷たい麦茶を持って駆け寄ってくる。これでもかと照りつける太陽の下で、戦士たちの休息だ。
「ちょっと風がでてきよったな」
杉山のおっちゃんが、汗をふきながら近づいてくる。
ひょろろろろ、ひょろろろ、涼やかなカジカガエルの鳴き声が、風に乗って広がる。
「準決勝の流ちゃんの相手、高校生やで」競技会委員を務める杉山の情報だ。
「あいつ、リュービ社の林プロをやっつけよったで。生まれも育ちも香美川で小学生の頃から、鮎釣りひとすじ。大学に行くだけが人生やないちゅうて、親父も高校卒業したらプロの鮎師になれ言うとるそうや」
「へえー、俺なんか街育ちで、二十二歳まで釣りというものとは縁がなかったのに。そいつは幸せなやつだな」
流介は、ふっと遠い目になって言った。その高校生のようないさぎよい生き方は、鮎釣りを始めるまでの流介には無縁であった。
「でもさ、その子が菅笠の先生の歳になるまでこの香美川で鮎釣りができるかどうかが問題ね」
彩が麦藁帽子の下から憂い顔で言った。
みんなが沈黙する。この日の空気に、トゲの様なものが刺さった。
準決勝は激戦だった。流介は少年鮎師に苦戦した。相手は香美川の水で産湯をあびた、川の御曹司だ。この川で生まれ育った者の観察眼で、野鮎の縄張りを見ぬき、次々に掛けていく。一方、流介は磨きぬかれた技と、マッキントッシュで積み上げてきたデーターをもとに、尾数を稼いでいく。
ゲーム終了のホーンが鳴ったとき、流介は十二尾、相手は十一尾、かろうじての勝利であった。
「君がアルティザンの仲間になってくれる日を楽しみにしてるよ」
流介と高校生鮎師は握手をかわす。少年の微笑む顔に八重歯が光る。
流介たちのさらに下流では、もうひとつの激戦が展開された。
古屋と厳。いぶし銀と赤銅。菅笠と坊主頭。生え抜きと新参。香美川の川面をステージにして、二人の役者は竿舞（かんぶ）を舞う。鮎が飛ぶ。玉網がはずむ。
まったく同尾数のまま、この対決は終了した。競技会委員がやって来て、二人の曳き舟をチェックする。これはプレイオフだ、と観客はざわめいた。
「ワシの負けだ。数は同じでも型が違いすぎる」
古屋が、観客を制して静かに言った。
競技会の正式ルールで、鮎の大きさは関係ないんですが、と委員がアピールする。
「ルールはそうだが、厳の掛けたのは大鮎ばかり。これで引き分けと言われては、ワシの菅笠が泣く」
「秀さん、俺はやってもいいんだぜ」厳が汗をふきながら、古屋に迫る。
「正直なところ、ワシはもう限界だ。流介は勝ったらしいし、決勝はあいつにまかせる」　古屋は菅笠を脱ぐ。それは、竿を納めたという意思表示だった。

「腹が減った。彩さん、飯にしてくれ」

　流介と厳、対決の時がきた。東雲橋の決闘だ。
　決勝戦の試合場は本部前のメインステージである。境界線の橋の上では、二人のサポーターたちがじっと成りゆきを見守っている。
　まず、前半の一時間半は、流介が上流を、厳が下流を釣る。橋の上流は、激しい流れが岩を噛む荒瀬である。流介は最初の養殖鮎をセットして、流心の脇ぎりぎり、オトリの泳力ぎりぎりの流れにコントロールする。
「うまいで、そこや」
　橋の上から、杉山が声を出すのと同時に、野鮎が流介のアルティザン・ハイパー・ストリームを絞りこんだ。
　ぐいぐいと引かれる。その力を流介が受けとめる。二尾の鮎が飛んでくる。腰の玉網をさっと抜いて、鮎に衝撃を与えないようにキャッチする。拍手がわいた。
　どんなにベテランの鮎師でも、養殖鮎が野鮎に変わった時は、ほっとする。そして、どんなもんだと周りを見渡す。流介も例外ではない。野鮎を新しいオトリにしながら、下で釣る厳の様子をうかがう。
　厳は、急流から瀬が開いてトロ場になるポイントで竿を出していた。
「流介、厳はまだ掛かってないわよおー。どんどん行けー」彩の檄がとぶ。
　川に向き直った流介は、力強く泳ぐオトリを、敢然と荒瀬に送りこんだ。すぐにズズーンと衝撃が伝わって頭の中が真っ白になる。香美川の野性が、牙をむいて流介のオトリにおそいかかる。そのパワーのすさまじさに、流介は川を走る。オトリをひきずったまま突っ走る野鮎より早く、下流にまわりこまないと、仕掛けを切られてしまう。
　こいつは引き抜きは無理だ、と判断した流介は、渾身の力で竿を上流にむけてキープしながら、引き寄せの体勢に入った。キュンキュンキュン、糸が鳴く。全神経、糸をつまんだ指先に集中して、玉網の中に二尾の鮎を吊しこむ。さすがの流介も大きく息を吐きだした。こんなペースで大鮎ばかり掛けてたら、とても数を稼げないぞ。
　その時、ロックン・ロックのサポーターから歓声が上がった。
　まだ釣果の無かった厳が、どんどん深場に入っていき、胸までつかってオトリを流心に泳がせ始めたのだ。それまで、誰も竿を出せなかったそこは、追い気にあふれた野鮎の聖地だった。たちまち一尾、二尾、三尾と入れ掛かりだ。厳は、流れに体をあずけたまま、豪快に野鮎を飛ばして取りこんでいく。
　流介は、厳とは逆に、岸辺から離れていった。川岸の葦の陰には、まだ野鮎が残っている。自然に泳がせれば掛かるはずだ。流介の狙いは当たった。流れるような動きで、次々と野鮎をキャッチする。
　サポーターたちは、ぴりぴりと緊迫した空気に支配され、黙って二人の技を見つめている。川面を吹く風が次第に強さを増す。杉林が揺れる。大きなトンビが風にのって輪を描く。
　香美川を取りまくすべてが、俺と厳を見ている。勝負の結果を待っている。もう計算はなかった。自分が何尾掛けて、厳が何尾掛けたのかも分からない。意識は、純粋に香美川の鮎と同化して、流れの中を突き進む。
　前半戦を終了した。上下を交代する二人の竿が交差する。長い竿が触れそうになった瞬間、激しく火花が散った。
　下流に入った流介は、まず、厳が釣り残しているトロ場をめざす。慎重に曳き舟の中からひときわ元気なオトリを選び、鼻カンをとおす。その鼻先を一番深い方向に向けて、そっと放つ。さあ行け、お前にまかせた。流介の気持ちが乗りうつった野鮎は、すーっと岸から離れていく。
「ちょっと古屋先生、一体、今、勝負はどうなっているの」
　夢中になって応援を続けていた彩がたずねた。
「流介が十一尾、厳が八尾…」
「よーし、よし。そのままそのまま」古屋の言葉をひきとって、彩がはしゃぐ。

「しかし、これからは厳の得意な荒瀬だ。油断はできん」と古屋が言ったとたん、ロックン・ロック陣営がどよめいた。厳の片手抜きが、決まる。
　四角い顔を鬼瓦のように怒らせた厳は、その汗を拭おうともせずオトリを竿先にぶらさげて、振り子のようにポイントに投げこんだ。オトリ交換の時間と、泳がせる時間を惜しんだ荒技だ。
「おー、厳の奴、勝負にでよった。気いつけや、流ちゃん」
　杉山が声をかける合間に、厳はまた一尾取りこむ。野鮎の追いが急によくなってきた。流介も掛けつづけるが、厳とはペースが違う。
「マイペース、マイペース。厳は厳、俺は俺だ」
　流介は岩陰にしゃがみこんで、野鮎から姿を隠す。
　時は、刻々と過ぎる。釣果は流介が二十尾、厳も二十尾。一歩もひかない戦いが続いている。追い気のある鮎は釣りつくしたのか、二人とも掛からなくなってきた。
「もう時間がないわ。流介、お願い、掛けて、掛けて、掛けて」
「流ちゃん、あともう少しやないか。もう一尾や」
「そこじゃ、そこじゃ、流介」
　流介と香美川を愛する者たちの悲痛な声援の中で、時間は刻一刻と過ぎていく。
　太陽が照りつける。トンビが舞う。橋をはさんで、上流に坊主頭の笹山厳、下流に長髪の河原流介。二人の鮎師が香美川の杭になる。
「や、やったぜ。俺の勝ちだ」
　厳の大声がこだましたのは、残り二分を切ろうとしている時だった。
　厳の剛竿が空に突き刺さる。野鮎のパワーがあらがう。ようやく観念した野鮎が、水面に顔を出す。引きずられたオトリ鮎が、苦しそうにもがいている。
　その時だった。黒い影が水面に急降下して、オトリ鮎が宙に浮いた。その下では、野鮎が激しく身をよじらせる。針が外れた。
　厳は、呆然とした。観衆も同じだった。
　トンビが厳のオトリ鮎をくわえて、太陽に向かって上昇している。厳の仕掛けが切れて、ひらひらと空を舞い、ふわりと水面に浮かぶ。うおーっというサポーターたちの声に流介が振りむいたとき、ホーンが鳴り響いた。試合終了だ。
　流介は、ゆっくりと本部テントに向かった。
　勝ち負けはいい。俺は今日、俺のすべてを出しきった。
「いやはや、お前さんには香美川の守り神がついているようだぜ」
　厳がため息まじりに言う。
「トンビに鮎をさらわれたのよ、この厳さんは」
　さすがの彩も、ここは同情するのみだ。
「なんだって、そんなことがあったのか」流介が驚く。
「おかげで、二尾損しちまって、俺の負けだ」
　意外や、厳はさばさばした口調で言う。
「トンビが俺の味方をしてくれたのか。はははは、これは面白い」
　流介は心の底から笑った。
「この香美川では新参者のお宅と、ひたすらこの川に通いつづけた俺との差だね。もっとも、腕と竿の違いだと言えないのが残念だが」
　銀色のヴェストを脱ぎながら、いかにも楽しそうに言ってのけた流介に、厳の細い目がにが笑いした。
「しょうがねえ、今年はお前に花をもたせてやるか。そのかわり……」
「そのかわり、お宅も、香美川の鮎師仲間に入れてやるとするか。これからは、俺のチェロキーに乗せてやるから、妙な連中とはもう付き合わないことだな」
「おっ、そいつはありがたい。でもな俺の言いたかったのは、そのかわり……」
「そのかわり、今日は俺にたっぷり酒を飲ませろでしょ、厳ちゃん」
　彩はそう言って、厳に缶ビールを差しだした。

「あたり。ついでに早く鮎を焼いてくれ。それと、ソウメンもだ」
　この野郎、調子にのりやがって、と流介は彩の肩に手を回した。彩は俺のものだぞ、まったく。
　彩が、こぼれそうな笑顔で流介をあおぎ見る。
「惚れなおしたかい、彩」
　河原流介は、いつものちょっと照れた笑顔を見せる。緑川彩は冷たいビールを流介の頬に押しつけた。
「さあ、乾杯」古屋が音頭をとる。
「やったで、流ちゃん、最高や」杉山のおっちゃんも寄ってくる。

　鮎師たちの祝宴が始まる。夏は、今、真っ盛りだ。
　いちにいのさん、の掛け声とともに流介は川に投げこまれた。優勝者への手荒い祝福だ。
香美川の流れの中では、鮎たちが、鮎たちの生命を全うしている。
　ああ、これだな。俺の心の傷が何であるか、俺はまだ知らない。しかし今、この瞬間、傷は癒されている。流介は、水の愛撫にたっぷりと身をまかせて、川から上がった。
　河原では、鮎を焼く煙が、香美川の空に高く高く昇っていく。
　その空に舞うトンビが、ひときわ高い木を越える。曲がりくねった林道が見える。そこには、真っ黒い煙を吐きながら疾走するダンプカーの一群がいた。トンビは谷間に落ちる影を見る。

　川は、流れる。

（第二部に続く）

２０１２年のあとがき

　この小説を書き始めてから、いつのまにか十九年も経ってしまいました。
時代背景は１９９３年なので携帯電話もそれほど普及はしていなくて、車に電話とファックスがついていたのが最先端の時代でした。
　どこにも発表せずに温存しつつぼちぼちと第二部を書いていたら、いつのまにか時代は電子書籍になってしまったようですね。とりあえずは完成している第一部だけを電子出版してみました。。
　読んでいただいた皆さんに最後にお断りをしておきます。本当は最初にお断りするべきなのでしょうが。
　この小説は鮎釣りに興味がない方が読んだら、それほど面白くないと思います。また自分で言うのも何ですが、小説としても完成度が高くありません。
　ただ本を書くという行為に本気に取り組みはじめた僕の習作として、まずは出版してみたかったのです。そのためにはある程度の分量が完成していて、しかも「一太郎」というソフトで書いていた「流れる」がとても都合がよかったのです。
　そんな僕の都合だけで出版したこの本を読んでいただいた皆さん、本当にありがとうございました。次の機会にはもう少し世の中の役に立つ本を出そうと思いますので、なにとぞご容赦ください。